

平成 22 年 4 月 30 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2009

課題番号：20720010

研究課題名 (和文) カント『オプス・ポストゥムム』の研究－後期草稿群を中心に

研究課題名 (英文) A Study on Kant's Opus postumum focusing on later manuscripts

研究代表者

内田 浩明 (UCHIDA HIROAKI)

大阪工業大学・知的財産学部・講師

研究者番号：90440932

研究成果の概要 (和文)：本研究では、カントが晩年に書き残した一連の草稿群である『オプス・ポストゥムム』のうち、特に 1800 年以降に執筆された第 7 束と第 1 束の思想を、批判期のカントの思想との異同に留意するとともにフィヒテをはじめとする同時代の思想家からのカントへの影響を加味しながら究明した。具体的には、『オプス・ポストゥムム』で述べられる「物自体」、「空間と時間」、「自己定立論」、「超越論哲学」について、当時の書評等も含め、さまざまな文献の読解を通じて解明した。

研究成果の概要 (英文)：This study aims to clarify Kant's thoughts in VIIth and Ist fascicles of Opus postumum, which were written after 1800, considering common points and different features in the critical periods and the influence on Kant from the contemporaries such as Fichte. Concretely, this study examines "the things in themselves", "time and space", "self-positing" and "transcendental philosophy" in Kant's Opus postumum by means of investigating various literatures including book reviews in those days.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：カント、『オプス・ポストゥムム』、影響、フィヒテ、自己定立論、超越論哲学

## 1. 研究開始当初の背景

報告者が『オプス・ポストゥムム』の研究に取り組んだ背景には、国内外の研究動向にある。海外では 1990 年以降、『オプス・ポ

ストゥムム』の研究が急速に進んでいる。にもかかわらず、我が国では欧米に比べると、『オプス・ポストゥムム』の研究は必ずしも進んでおらず、『オプス・ポストゥムム』を中心にカント哲学を解明する研究者の数もきわ

めて少ない。とりわけ 1800 年以降に書かれたと考証されている後期草稿群に関しては、その傾向は顕著である。

こうした国内外の研究事情に鑑み、本研究では『オプス・ポストゥムム』のなかでも後期草稿群に焦点を当てながら、その思想の解明を行った。

## 2. 研究の目的

本研究課題の目的は、カントの『オプス・ポストゥムム』のうち 1800 年以降に書かれた草稿群の思想を、いわゆる「批判期」との異同に留意するとともにカントと同時代の哲学者・思想家との関係や影響を加味しながら究明することにある。

(1) 『オプス・ポストゥムム』は、その内容から、1796 年頃から 1800 年までの間に執筆された「自然科学的・自然哲学的」な内容を多分に含む草稿群と 1800 年から 1803 年までの間に執筆された「認識論的・形而上学的」問題を扱った草稿群とに分けられる。

このうち、後者に属するのは、第 7 束と第 1 束と言われる草稿群であるが、第 7 束においては、「物自体」や「空間と時間」、そして批判期には殆ど述べられなかった「自己定立」に関する叙述が散見される。また第 1 束においてカントは、批判期には見られない「超越論哲学の最高の立場」という術語を用いつつ、「理論理性と実践理性」ないしは「理論哲学と実践哲学」の統一の問題に取り組むことになる。こうしたカント哲学にとって重要な概念を、批判期との異同を見据えつつ究明することが、本研究の目的の一つである。

(2) 『オプス・ポストゥムム』の後期草稿群の執筆時期を考慮に入れると、ドイツ観念をはじめとする当時の思想家との関係も重要となる。そもそも「自己定立論」はフィヒテ哲学の根本概念であり、「理論理性と実践理性」を総合し体系的に統一するという考えはラインホルトやドイツ観念論に通底する主要テーマの一つである。

カントが同時代の哲学者やドイツ観念論に与えた影響については、国内外を問わずドイツ観念の側から数多くの研究がなされている。しかし逆に、カントに与えた影響に関しては、国内では殆ど研究されていない。『オプス・ポストゥムム』の思想を解明するとしても、特にカントの側から同時代の哲学者・思想家との関係について究明することも本研究の目的の一つである。

## 3. 研究の方法

哲学に関する研究という性格上、研究の方

法としては文献の読解が中心となる。

「批判期」と『オプス・ポストゥムム』との異同を解明するという意味では、カントの主要著作と『オプス・ポストゥムム』を丹念に読むことを通じて、その思想内容を比較検討することを要視した。

また、カントと同時代の哲学者の思想的関係を究明するという点では、他の哲学者・思想家のテクストを読解することはもちろんであるが、『オプス・ポストゥムム』の後期草稿群を執筆していた時期のカントの公刊著作は、それまでの講義録などにとどまる。このため、カントへの影響を究明する方法として、カントが『オプス・ポストゥムム』を執筆していた時期に他の思想家に宛てた書簡等も大いに活用した。

上記の事柄に加えて、その頃の思想的状況を知るうえでは、当時の雑誌記事、とりわけ書評も極めて重要な意味を持つ。そこで、当時公刊された哲学関連の雑誌のうち、カントが書簡や『オプス・ポストゥムム』等で言及しているものや目にしたであろうと推察されるものを、適宜参照しながら研究を遂行した。

## 4. 研究成果

本研究課題の着手年度にあたる平成 20 年度は、『オプス・ポストゥムム』の第 7 束を中心に研究を遂行した。第 7 束の主要概念は、既に述べたように、「物自体」と「空間と時間」、そして「自己定立論」である。このうち、(1) 「物自体」と「空間と時間」については、論文「カント『オプス・ポストゥムム』における同時代の思想家からの影響」において究明し、(2) 「自己定立論」に関しては、当該年度にさしあたり「日本フィヒテ協会」において口頭発表を行い、これを平成 21 年度にかけて彫琢し、「カントとフィヒテの自己定立論」というタイトルのもと論文して公開した。また平成 21 年度には、その作業に加え、(3) 第 1 束に関する研究も行い、「カント研究会」において「超越論哲学」とそれに密接に関連する「超越論的観念論」をテーマとする口頭発表を行った。

以上が研究期間中に公開した成果を時系列に沿いながら示したものであるが、以下では上記 (1) ~ (3) に関してその具体的内容の説明を行うと共に研究終了時だからこそはじめて提示可能な個々の論文や発表の関連性、そして着眼点の違いを含めて説明する。

(1) まず、批判期との異同という点で言えば、『オプス・ポストゥムム』では新しい術語の使用やドイツ語とラテン語との併記など、とりわけ語法上の違いが際立つことで

ある。例えば、第7束においてカントは「物自体」を「思考物 (Gedankending, ens rationis)」であると繰り返し強調しているが、批判期では「物自体」を直接、「思考物」と述べている箇所は見あたらない。また、現象との関係で言えば、第7束の直前に書かれた第10束において「現象の現象」という新しい術語が導入され、物自体と現象との関係が説明される試みがなされる。そこでは、形而上学から見れば、現象である客観が物理学という自然科学から見れば物自体であるとされる。そして第7束においてカントは「物自体と現象」の両者があくまで「同一の物(事象) に対する二つの関係 (Beziehung, respectus)」であり「観点」の違いであることを執拗なまでに強調する。『オプス・ポストゥムム』において現象と物自体との関係を説明する際、カントが最も強調するのは、同一の事象に対する「二重の関係・観点」というこの主張である。

こうした発想自体は、『純粹理性批判』の第二版の「序文」などに見られ、批判期以来の「物自体と現象」に関するカントの基本的な視座である。しかし、これらのことを同時代の思想家との関係という側面から見れば、決して意味がないわけではない。というのも、当時の哲学者・思想家たちはカントの物自体論において或る意味では最も基本的とも言える前記の主張に着目することが殆どないからである。実際、物自体を「理性の完全な歪曲、全く不合理な概念」と見なすフィヒテには、上述の「物自体と現象」を「二重の観点」と解する発想は見られない。また、カントの信奉者として知られる J. S. ベックでさえ、カントに宛てた書簡などから、「物自体」(とそれによる「触発」)に懐疑的であり、この点を看過している。こうしたことと先述のラテン語の併記という事態を併せて考えると、批判に晒されていた物自体という概念を、それまでの哲学的伝統の中に位置づけるとともに、その正当性と独自の意味を強調しようとするカントの試みと解せる。

「空間と時間」に関しては、『純粹理性批判』の「超越論的感性論」で述べられている内容と同様の主張が第7束のなかで幾度と無く繰り返される。このため、アディクセスなどは『オプス・ポストゥムム』には特に目新しい論点が提示されていないと断じている。しかし、『純粹理性批判』とは違って『オプス・ポストゥムム』では「空間と時間」を受容性の契機ではなく、むしろ主体の自発性に関連させる叙述が見られる。この考えは、自己定立論との関連において重要なものとなる。それゆえ、次に自己定立に関して考察した。

(2) 先に述べた「物自体」や「空間と時

間」と違って「自己定立」は、フィヒテの基本概念である。にもかかわらず、報告者が研究期間中に調査したかぎり、『オプス・ポストゥムム』全体を通じてもフィヒテの名は一度も登場しない。加えて、海外の先行研究でもカントとフィヒテの自己定立論の違いに関して詳しく扱ったものは見られない。そこで、「カントとフィヒテの自己定立論」においては、語法という観点からではなく、むしろ思想そのものとして両者の自己定立論の比較考察を行った。

自己定立論の萌芽は『純粹理性批判』の統覚論などにも見受けられ、『オプス・ポストゥムム』の自己定立論においても批判期以来の「叡智的自我」と「感性的自己」という「二重の自我」の思想を堅持しながら展開されている。しかし、批判期と異なり、『オプス・ポストゥムム』においては、自我の活動が「論理的」活動と「形而上学的」活動という二つの活動として述べられるようになる。

そして報告者の解釈によれば、とりわけ後者の活動が重要な意味を持つようになる。というのも「形而上学的」活動とは、叡智的で自発的な自我が「空間と時間」という形式に則って自己自身を客体化、すなわち感性化するはたらきに他ならないからである。言い換えれば、自発的で叡智的な自我がいかにして自己自身を客体化(=感性化)するのかを説明する点にこそカントの自己定立論の眼目が存する。その限り、「事行」や「対自」、そして「知的直観」から展開されたフィヒテの自己定立論とは全く異なる。こうしたことを、『オプス・ポストゥムム』の後期草稿群とそれ以前に書かれたフィヒテのイェーナ期知識学との比較考察を通じて明らかにし、カントが『オプス・ポストゥムム』において独自の自己定立論を開陳するのには、やはりフィヒテやその賛同者に対抗する意味合いが込められていることについても言及した。

(3) 『オプス・ポストゥムム』の第1束を中心にカントが「理論哲学と実践哲学」の統一を「超越論哲学の最高の立場」から試みようとしたことは、既に述べた通りである。しかし、カントが最晩年になぜそのような試みを敢えて行おうとしたのかについては、本研究期間中に英語圏とドイツ語圏、そしてイタリアなどさまざまな先行研究を参照したが、必ずしも明らかにはされていない。

そこで、報告者は『オプス・ポストゥムム』においてカントが「超越論哲学」の概念を言わば、拡張する一つの大きな要因として、1800年頃から実践哲学を含む全哲学の体系こそ本来の「超越論哲学」であるという認識が徐々に浸透していったことを指摘した。これを裏付けるために、フィヒテの『知識学への第二序論』におけるカント批判の主旨、そ

れに対する応答とも言える、カントの『フィヒテの知識学に関する声明』、さらにはその声明を公にするそもそもの発端となった『ブーレの超越論哲学の構想』に関する書評」ならびにブーレの当該著作等の文献を駆使しつつ、前記の解釈を提示した。

他方、「超越論的観念論」に関しても、周知のように、フィヒテやシェリングをはじめ独自の意味で使われるようになるが、『オプス・ポストゥムム』においてカントは、シェリングとともにスピノザやリヒテンベルクについても「超越論的観念論」と述べるようになる。

この言及を巡っては、海外では様々な解釈がなされているが、国内においては殆ど研究はなされていない。さて、その海外の先行研究では、『オプス・ポストゥムム』に「リヒテンベルクのスピノザ」という文言があることから、スピノザへの言及はリヒテンベルクに負うところが大きいとされ、カントの立場が「超越論観念論」であることから、カントが彼らを積極的に評価したとする解釈が主流である。

しかしながら、『オプス・ポストゥムム』には批判期と同様、スピノザに対するネガティブな文言が散見される。また、リヒテンベルクに関しては、実際にリヒテンベルクの当該著作を繙いてみると、スピノザに関する叙述は極めて少ない。しかもリヒテンベルクは「我々の外」を認めず、「観念論を論駁することは不可能である」と繰り返し強調している。その意味においてむしろリヒテンベルクは、カントが『純粹理性批判』や『プロレゴメナ』等で徹底的に批判した、悪しき意味での観念論とほぼ同様の考えを持っていると言える。

こうしたことから、報告者はカントが「スピノザの超越論的観念論」といった具合に、敢えて名を付けながら述べるのは、スピノザやリヒテンベルクに共感したのではなく、むしろ彼らの思想を、カント自身とは別種の「観念論」、わけても当時流布していた「超越論的観念論」として批判するためである、という解釈の可能性を示唆した。

「超越論哲学」と「超越論的観念論」に関する以上の解釈は、「カント研究会」での口頭発表原稿によるものであるが、その質疑応答において、『オプス・ポストゥムム』における「スピノザないしはスピノザ主義」という文言が、そもそもスピノザの思想それ自体を指すのかどうか、という貴重な指摘を受けた。これに関しては、ハーマンの1785年11月20日付ヤコービ宛書簡のなかで、カントはスピノザを真剣に研究したことがない、とハーマンに打ち明けたとされる。ハーマンがヤコービに前記の報告した時期と『オプス・ポストゥムム』の後期草稿群を執筆した時期

とでは、ドイツにおけるスピノザ思想の普及状況や位置づけも異なっている。その間にカントがスピノザにどのような形で接したのかはいまだ研究されていない。

今後の展望としては、『オプス・ポストゥムム』におけるスピノザないしはスピノザ主義ということで、具体的にカントが何を（あるいは誰を）念頭に置いているのかを明確にするとともに、できれば、カントがスピノザに関する知識をどのような著作や思想家を経由し知ようになったのかも含め究明することにより、『オプス・ポストゥムム』の思想解明をより一層充実したものになりたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2件)

1. 内田 浩明, 「カントとフィヒテの自己定立論」, 査読有り, 大阪工業大学紀要(人文社会篇), 第54巻第2号, 2010年2月27日, pp. 1~14

2. 内田 浩明, 「カント『オプス・ポストゥムム』における同時代の思想家からの影響」, 査読有り, 大阪工業大学紀要(人文社会篇), 第53巻第2号, 2009年2月27日, pp. 11~14

[学会発表] (計 2件)

1. 内田 浩明, 「『オプス・ポストゥムム』の超越論的哲学 — 同時代の思想家との関連」, カント研究会第240回例会, 2010年3月27日, 於 京大会館

2. 内田 浩明, 「カントとフィヒテの自己定立論 — 『オプス・ポストゥムム』とイェーナ期知識学を手がかりに」, 第24回日本フィヒテ協会大会, 2008年11月22日, 於 広島大学

[その他]

ホームページ等

<http://www.oit.ac.jp/japanese/toshokan/tosho/kiyou/index.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

内田 浩明 (UCHIDA HIROAKI)

大阪工業大学・知的財産学部・講師

研究者番号: 90440932